



MiltonのComusについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 亀廻井, 茂勝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00003771

Milton の *Comus* について

亀 廻 井 茂 勝

ある文学作品が、後になって、作者の意志に係わりなく別な題名をつけられ、その新しい題名の方がよく知られるようになる、ということがある。John Milton (1608-74) の書いた仮面劇 (masque, mask) がその例である。1637年に出版されたその仮面劇の表題紙は次のようになっている。A MASKE/ PRESENTED/ At Ludlow Castle,/ 1634 : /On Michaelmasse night, before the/ RIGHT HONORABLE,/ IOHN Earle of Bridgewater, Vicount BRACKLY,/ Lord Praesident of WALES, And one of/ His MAIESTIES most honorable/ Privie Counsell. LONDON, Printed for Hymphrey ROBINSON, at the signe of the *Three Pidgeons* in *Pauls Church-yard*. 1637.⁽¹⁾ ここでわかるように題名の中に現在その仮面劇が広く呼ばれている“Comus”⁽²⁾ という語は見あたらない。

この仮面劇は、1634年の9月29日のミカエル祭日の夜に Shropshire の Ludlow 城において Bridgewater 伯爵のウェールズ総督就任を祝うために書かれ、3年後の1637年に出版されたものである。ミカエル祭日は、役所仕事、裁判、法律などにとっての区切りとなる日であり、賃貸などの契約が発効し、総督や地方の役人がその任に就く日であった。⁽³⁾ 1634年当時の Milton は2年前に大学を終えて、ロンドンにほど近い Hammersmith や Horton で父親の援助によりギリシャ・ラテンの古典の読書中心の生活をしていた頃、⁽⁴⁾ で25歳であった。彼がこの作品を書くにいたった経緯は次のように考えられている。彼の友人で音楽家の Henry Lawes (1596-1662) が Bridgewater 伯爵家の子供たちの音楽教師をしていた。⁽⁵⁾ その Lawes との関係から仮面劇を書くことを伯爵家から依頼された。それはおそらくその2年ほど前に Milton が Bridgewater 伯爵の継母であり、かつ義母にあたる Derby 伯爵の未亡人⁽⁶⁾ のために仮面劇 *Arcades* を書いたが、それが好評だったからであった。これは109行からなるもので、内容は、Derby 伯爵未亡人の名声にひかれ羊飼たちが彼女を探して Arcadia からやってくるというものである。⁽⁷⁾ 1634年に書かれたこの仮面劇はおそらく、一門の醜聞つまり Derby 伯爵未亡人の義理の息子である Castlehaven 伯爵が、そのきわめて残酷な性的乱行(家僕に自分の妻を‘rape’させる。二人の家僕と‘sodomy’の関係を持つ等)のために1631年に斬首の刑を受けたという Castlehaven 醜聞から一門が立ち直るための「一族による^{げん}駿なおしの催し」と考えられる。⁽⁸⁾

仮面劇は中世の四旬節 (Lent) 前の祝祭、つまり謝肉祭 (carnival) または中世の奇跡劇 (miracle play)、道徳劇 (morality play)、仮装無言劇 (mumming)、野外劇 (pageant) に由来し、16世紀から17世紀前半にかけて英国において流行したが、初期のものは歌と踊りと無言劇であり、後には台詞も入るようになった。また仮面 (masque, mask) をつけたのは初期の数年間だけであった。また仮面劇は、宮廷人が係わる結婚、来訪、就任などの儀式において主賓に対する表慶の目的で余興として演じられることが多かった。それゆえ、内容は深刻で悲劇的なものではなく、歌と踊りにふさわしい和やかで牧歌的なものであった。しかし、後に Ben Jonson (1572-1637) などの努力により仮面劇は文学的な価値を持つようになった。⁽⁹⁾ ちなみに、1618年に上演された *Pleasure Recon-ciled to Virtue* にも Comus という名の歡樂の神が登場する。⁽¹⁰⁾

Milton の生前において、この仮面劇は 1654 年と 1673 年の 2 度出版されたが、表題は 2 度とも *A Mask Presented at Ludlow Castle*,……となっている。⁽¹¹⁾ ではどうしてこの仮面劇がその中に登場する魔法使いの名をとって *Comus* と呼ばれるようになったのだろうか。最初にこの作品を *Comus* と呼んだのは、理神家 (deist) で Milton の伝記作家の John Toland (1670-1722)⁽¹²⁾ である。彼は *The Life of John Milton* (1698) の中でこの作品を “his *Comus* or Mask presented at Ludlow Castle,”⁽¹³⁾ と記述しており、1738 年には詩人で神学者の John Danton (1709-63)⁽¹⁴⁾ がこの仮面劇を翻案し *Comus* という題をつけて出版した。⁽¹⁵⁾ それ以後 *Comus* という呼び方が通例となるのである。変更された理由はおそらくこの仮面劇の内容等とも関連があると思われるところがあるのでこの件の考察はもう少し先のこととしたい。*Comus* には Milton がそのモデルとしたと考えられている作品がいくつか存在する。たとえば乙女が試練に会う George Peele (1558?-97?) の *Old Wives Tale* (1595) や John Fletcher (1579-1625) の *The Faithfull Shepheardesse* (1610?) などをあげることができる。⁽¹⁶⁾

さて、*Comus* は前述の *Arcades* の 109 行よりもずいぶん長い 1,023 行からなる作品である。登場人物は、守護天使 (The Attendant Spirit) 後に Thyrsis に変装、*Comus*, *Comus* の家来たち、令嬢 (The Lady)、兄、弟、Sabrina であり、令嬢、兄、弟の役は Bridgewater 伯爵の三人の子供たちが演じた。彼らはそれぞれ 15 歳、11 歳、9 歳であった。場所は森、*Comus* の宮殿、Ladlow 城の 3 カ所である。

最初の場面は荒れた森⁽¹⁷⁾ の中である。守護天使が現われて、92 行にわたりプロローグを述べる。その中で美德を求める人を助けるという彼の使命を語る。次にウェールズを治める Bridgewater 伯爵を賛美する。そしてその伯爵の 3 人の子供が彼らの父の就任の儀式へと向かっているが、この森で危険にさらされるであろうから、それを助けるために主神の Jove に遣わされたのだと語る。次に、*Paradise Lost* 冒頭の詩神への加護の祈願 invocation の文章⁽¹⁸⁾ を思わせる言葉を述べる。

And listen why, for I will tell you now
What never yet was heard in Tale or Song
From old or modern Bard, in Hall or Bow'r. (43-45)

次に酒の神 Bacchus と「太陽神の娘」で魔女の Circe との間に息子が生まれ、その息子が *Comus* と名付けられたこと、彼は魔法においては母親にまさり、その魔法の酒で旅人の顔を獣面にかえ快楽へとさそっている、だから Jove の恵みを受ける者がこの森を通る時には、天から降りて、その人を守るのだという。そのために伯爵家の羊飼いに変装すると語る。

次に *Comus* が魔法の杖と酒杯を持ち家来たちとともに登場し 52 行にわたり夜の快楽へのさそいの言葉を述べる。

What hath night to do with sleep?
Night hath better sweets to prove,
Venus now wakes, and wak'ns Love
Come let us our rites begin,
'Tis only daylight that makes Sin,
Which these dun shades will ne'er report. (123-28)

ここにおいて夜と快楽、日の光と罪という関係を *Comus* はどう理解しているかがわかる部分で

ある。つまり夜における快樂は罪とはならないのだから楽しもうではないか、とっているのである。このあたりの *Comus* の愛についての観念は ‘sophistication’ そのものであると平井正穂氏は指摘している。⁽¹⁹⁾次に乙女、つまり令嬢の足音を聞き、魔法の粉を空中に撒き、かくれて様子をうかがう。令嬢は 49 行にわたり、独白する。今まで聞こえていた酒宴をひらいていた人々と会うのは気がすすまないこと。弟たちが、彼女のために冷たい果実をとりに行き、まだ戻らないこと。夜の闇に困惑していると妄想が彼女の心を動揺させるが神の加護を信じていることを語る。次に 14 行にわたってこだま Echo に弟たちの居場所をたずねる歌を歌う。すると *Comus* が登場し、令嬢の歌のすばらしさに感嘆し、自分の妻にしたいと思い、彼女の歌をほめて近づき、そして令嬢から彼女の弟たちを探していることを聞きだす。*Comus* はその二人を見かけたといい、彼らを見つめる手伝いをしてあげようと言って自分の家に彼女を連れ去る。

次に兄弟が登場し、約 150 行にわたる姉の身を案ずる二人の対話が始まる。弟は姉の身に危険がふりかかるのではないかと心配するが、兄は姉の持つ純潔の力を信じている。その二人の特徴を表わしていると考えられる文章を弟、兄の順で引用する。

You may as well spread out the unsunn'd
Of Miser's treasure by an outlaw's den,
And tell me it is safe, as bid me hope
Danger will wink on Opportunity,
And let a single helpless maiden pass
Uninjured in this wild surrounding waste. (398-403)

I mean that too, but yet a hidden strength
Which if Heav'n gave it, may be term'd her own :
'Tis chastity, my brother, chastity :
She that has that, is clad in complete steel,
And like a quiver'd Nymph with Arrows keen.
May trace huge Forests and unharbor'd Heaths,
Infamous Hills and sandy perilous wilds,
Where through the sacred ray of Chastity,
No savage fierce, Bandit or mountaineer.
Will dare to soil her Virgin purity : (418-27)

弟は現実的で、実際的である。彼の用いる比喩も守銭奴の宝を盗人の巣窟の前にさらすという具体的なものである。それに対し、兄は神を信じ、姉の持つひめられた力つまり純潔の力を固く信じて、姉の安全を願っているのである。次に羊飼いの姿をした守護天使が登場し、令嬢が *Comus* に連れて行かれたらしいことを告げる。兄はこの状況においても美德の力を信じ、剣をとって *Comus* のところに攻めこもうするが *Comus* の力を知っている守護天使がおしとどめ、二人に薬草 *moly* よりも効き目のある *Haemony*⁽²⁰⁾ という魔よけの薬草を与え、二人を *Comus* の居所へと案内する。

第二の場面は、豪華な *Comus* の宮殿である。音楽、山海の珍味がある。*Comus* は魔法の椅子に座わらされている令嬢に酒をすすめるが、彼女はそれを拒絶する。*Comus* は魔法の杖で脅すが、神を信じる令嬢はひるまない。*Comus* は言葉たくみに酒をすすめるが、善人だけが善い物を与えるこ

とができると反論する。次に彼は禁欲を称賛する人間の愚かさを語り、自然の賜物を楽しむのが当然なのだという。次に美についていう。

Beauty is nature's coin, must not be hoarded,
 But must be current, and the good thereof
 Consists in mutual and partak'n bliss,
 Unsavory in th'enjoyment of itself.
 If you let slip time, like a neglected rose
 It withers on the stalk with languish't head. (739-44)

Comus は美を貨幣の比喩で述べているが、美が非常に現実的で日常的なレベルに引きおろされる印象がある。そしてバラの比喩は「現在を楽しめ」carpe diem ということで、これも現実的で、享乐的な考え方である。Comus の考え方は当然、兄の考え方よりも弟のそれ近い。⁽²¹⁾次に令嬢は、自然の賜物は少数の者が贅沢をするために与えられるのではなく皆に平等に分配されるべきものだと反論する。このあたりは、現代に生きるわれわれ消費社会に住む者に対する批判としても十分通用する考えである。そして彼女は乙女の純潔についての教理を理解することは Comus にはできないであろうという。Comus は彼女の言葉の背後にある力に冷汗をかくがもう一度酒杯をすすめる。その時兄弟が剣をぬいてかけこみ酒杯を奪い地面に投げて砕く。Comus と彼の家来たちが退散する。守護天使が登場し、魔法の杖がなければ令嬢を解き放すことができないというが、彼は別な方法を思い出す。ここからほど近い Severn 川のニンフ Sabrina に助けを求めることであった。そして守護天使自ら助けを求める歌を歌う。すると Sabrina がニンフを従えて登場し、願いをかなえてここに来たと歌う。守護天使は令嬢の魔法を解くことを彼女に願う。Sabrina は令嬢に水をふりかけて魔法をとく。水をふりかけることは当然、洗礼と類似する行為である。⁽²²⁾またその行為を神の恩寵 (divine grace) を与える象徴と考える立場もある。⁽²³⁾ Sabrina とニンフは退き、令嬢が椅子から立ち上がる。守護天使はこれから父上の屋敷で行われる催しに皆で行って大喜びさせてやろうと出かける。

第三の場面は Ludlow 城である。守護天使が令嬢と兄弟をともなって登場し、三人を彼らの父母に対面させ、彼らが立派に成長し、神の与えた信仰、忍耐、節操の試練にたえて不朽の栄冠を得たと告げる。踊りが終わり、守護天使がエピローグを述べる。まず自分がこれから飛んだ行く楽園の美しさを語る。その上方には、Cupid が Psyche を抱いている。そして Psyche は彼の花嫁となり「青春」と「喜び」が生まれることになるといい、最後に次のように語るのである。

Mortals that would follow me,
 Love virtue, she alone is free,
 She can teach you how to climb
 Higher than the Sphery chime ;
 Or if Virtue feeble were,
 Heav'n itself would stoop to her. (1018-23)

この最後の 6 行に Milton がこの作品でいわんとするところが集約されていると思われる。つまり、美德を愛する者が自由を得、神の加護を受けながら、神のもとへと行くことができる、という

ことである。

以上みてきたことから、この仮面劇は令嬢の純潔と *Comus* の肉欲が誘惑という形でぶつかりあったが、最終的には神の加護により令嬢の純潔がうちかつ、というものであるとまとめることができよう。Milton の考える純潔は必ずしも独身主義とむすびつくのものではない。彼が 1642 年に出版した *An Apology Against a Pamphlet* の中に 1625 年頃から 1638 年にわたる彼の自叙伝的な部分があり、その中で「結婚を汚れた行為と呼んではならない」⁽²⁴⁾ と述べている。また、前述のように、*Comus* の守護天使のエピローグの中に Cupid と Psyche の結婚から「青春」と「喜び」が生まれるとある。そして *Paradise Lost* には、結婚愛についての賛歌がある。⁽²⁵⁾ つまり、Milton の考える純潔は結婚とか独身とかいうのではなく美徳ということであったのだらうと思う。

Comus にも誘惑ということがでてくる。Milton の作品では、誘惑は *Paradise Lost* (1667) における Satan の Eve に対するもの、*Paradise Regained* (1671) における Satan の Christ に対するもの、*Samson Agonistes* (1671) における Dalila の Samson に対するもの、それに *Comus* (1634) における *Comus* の The Lady に対するものの 4 つあることになる。誘惑というものは人間が生きて行く上で避けて通れないものである。それゆえ、人間というものを描く文学作品の中に誘惑のテーマが出てくるのは当然といえる。*Comus* における誘惑は、仮面劇という形式のせいもあるのか魔酒を飲むという具体的な行為をめぐって行われるので非常に直接的な印象を与えると思う。Milton は 25 歳の若さから誘惑のテーマを持ち、それを 30 年以上も持ちつづけたことになる。⁽²⁶⁾ 平川泰司氏は少し視点をずらして次のように述べている。

ミルトンは生涯節制と放縦のテーマを追い続けた。それはこれが必然的に選択の問題と絡み合っているからである。この選択の問題こそ彼の心を捉えて離さなかった関心事なのであった。快楽の誘惑に抗しながら正しい選択を行い、節制を守るということ、これこそキリスト教徒として人間のあるべき姿だと彼は信じたのであった。⁽²⁷⁾

Samuel Johnson (1709–84) のいうように *Comus* は *Paradise Lost* の発端と呼べるのかもしれない。⁽²⁸⁾ Johnson はまた *Comus* について、これ以上詩的な作品は見出しがたい、とほめている一方で、劇としては欠陥があるという。その行動に不自然さがあるという。たとえば、姉が道もない森の中で疲労している時、帰り道に迷うほど遠くまで果実をとりに行き、姉をひとりきりにしておく行動などを指摘している。⁽²⁹⁾ このような考え方に対しては、仮面劇の性質上あまり論理的に考えることはないのではないかという意見が多い。とはいいいながら、*Comus* の令嬢、兄、弟の台詞は 15 歳、11 歳、9 歳の子供に対しては内容が高度で難しすぎるという印象があることもたしかである。このことは前述の Castlehaven 酷聞と関係があるかも知れない。つまり、Milton は就任式における表慶のほかに一族の浄化⁽³⁰⁾ の意味をこめた仮面劇を書いたからこのような内容のものになったという考え方である。

さて前述の「どうしてこの仮面劇が *Comus* と呼ばれるようになったのであろうか」という問題についての考察に入りたい。まず第 1 に考えられるのは *A Mask Presented at Ludlow Castle* では長すぎるし、Mask の内容が特定できるような言葉がないので不便であること、である。ただし、Ludlow Castle は場所を特定する語ではある。しかし、この作品の内容と関係がありそうである。Don Cameron Allen は題名の変更について、次のように自分の考えを卒直に述べている。

……The reason for this is clear ; the character of *Comus* dominates the masque whether

Milton intended it or not. One cannot imagine *Macbeth* if it were untitled getting the popular title of *MacDuff*, or *Hamlet* becoming *Claudius*. Likewise if Milton's theme of chastity had been firmly brought home, this masque might be known as *The Mask of Chastity* or *The Mask of the Virgin*.⁽³¹⁾

また Comus の弁舌がすぐれていることに関しては、E. M. W. Tillyard も次のようにいっている。
 "...Comus speaks so well that Milton has been accused of being here (as elsewhere) on the Devil's side without knowing it."⁽³²⁾つまり、この作品においては Comus が目立ち、いわば主人公のように見える、ということである。これは Comus の人間観や自然観が現代人に近いからわれわれが Comus に親近感を持ってしまうことも一因であると思う。以上まとめてみると形式と内容の両方の理由で題名が変更されたということになるであろう。しかし、Milton がたとえ *Comus* と題名をつけたくても、仮面劇というジャンルの持つ制約つまり、主賓に対する表慶として行われるものであるということから、やはり *Comus* という題はつけにくかったであろう。

前述のように、この作品は令嬢の純潔と Comus の肉欲が誘惑という形でおつかりあったが最終的には神の加護により令嬢の純潔がうちかつ、というものである。そして作者がこの作品でいわんとすることは、美德を愛する者が自由を得、神の加護を受けながら神のもとへ行くことができるということである。最後に Milton が 1644 年に出版の自由を求めるために書いた論文 *Areopagitica* の中で自由、節制、快楽、美德などの関係について語っていることを引用したい。

We our selves esteem not of that obedience, or love, or gift, which is of force : God therefore left him free, set before him a provoking object, ever almost in his eyes ; herein consisted his merit, herein the right of his reward, the praise of his abstinence. Wherefore did he creat passions within us, pleasures round about us, but that these rightly temper'd are the very ingredients of vertu ?⁽³³⁾

おおよその意味はつぎのようになる。われわれは強制されてなされたことを評価しない。だから神は人間を自由にしておき、目の前に人間を誘惑する物をおいたのだ。ここに人間の真価、報酬を受ける権利、節制に対する賞賛があるのだ。神はなぜわれわれの中に情欲をつくり、われわれのまわりに快楽をつくったのか。その理由は、これらが正しく混ぜ合わされると徳の成分となるからである。

注

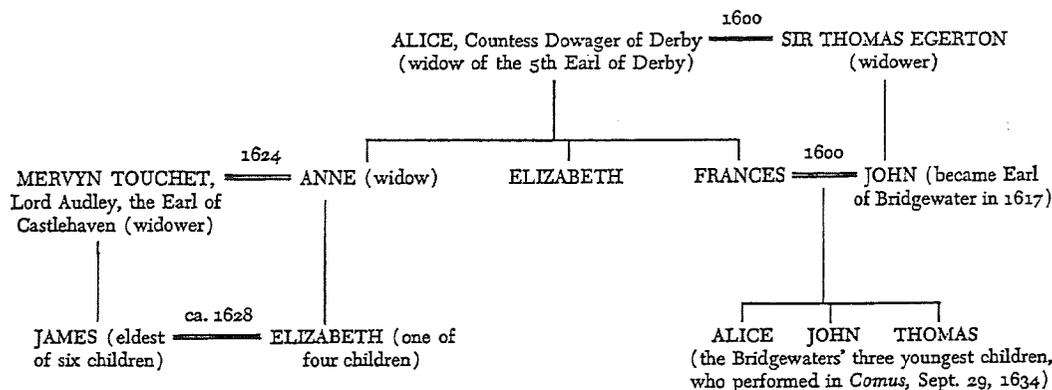
Milton の詩作品の引用は M. Y. Hughes, ed., *John Milton : Complete Poems and Major Prose* (The Odyssey Press, 1957) による。

- (1) Helen Darbishire, ed., *The Poetical Works of John Milton* (Oxford University Press, 1955), II, 171.
- (2) Comus はギリシャ語で宴 revel とか merrymaking を意味する語 *Kōmos* に由来している。OED によれば 1634 年の Milton の *Comus* から初出例であるが、Ben Jonson の *Pleasure Reconciled to Vertue* (1618) にも Comus という名が出てくる：逢坂信吾『盲詩人ミルトンを惟う』昭和 44 年丸善 106 頁の注に Comus はラテン語で、Comedy (喜劇) と語原同じ、とある。
- (3) Leah S. Marcus, "A 'Local' Reading of *Comus*," in *Milton and the Idea of Woman*, ed. Julia M. Walker (University of Illinois Press, 1988), p. 75 ; またこの日に就任する理由は祈禱書 (*The Book of Common Prayer*)

の定めにより、その日の夕方の礼拝において読む聖書の文章としてシラ書〔集会の書〕44:1「誉れ高き人々をたたえよう」があるからという指摘がある。William B. Hunter, ed., *Milton's English Poetry* (Bucknell University Press, 1986), p. 72. なお聖書の日本語訳は聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき1987年 日本聖書協会 による。

- (4) John Milton, *The Second Defence of the People of England* (1654) in *John Milton Complete Poems and Major Prose*, p. 828.
 (5) William Riley Parker, *Milton A Biography* (Oxford University Press, 1968), I, 80.
 (6) この複雑な関係の理解のために家系図が役立つ。なお, Castlehaven 伯は後に本文でふれる醜聞の当事者である。

FIGURE 1
THE DERBY-BRIDGEWATER-CASTLEHAVEN FAMILY



Barbara Breadsted, "Comus and the Castlehaven Scandal," in *Milton Studies* III, ed. James D. Simmonds (University of Pittsburgh Press, 1971), p. 204 より。

- (7) John Broadbent et al., eds., *John Milton Odes, Pastorals, Masques* (Cambridge University Press, 1975), p. 90.
 (8) *Milton Studies* III, pp. 201-24. なお注6の家系図も参照；宮西光雄「仮面劇『コウマス』をめぐって」555頁『ミルトン英詩全訳集上』1983年 金星堂
 (9) *John Milton Odes, Pastorals, Masques*, p. 88；*OED* Masque 2.A；『ミルトン英詩全訳集上』546頁；ジョン・ミルトン『仮面劇コウマス』才野重雄訳 1958年 南雲堂 119頁
 (10) John G. Demaray, *Milton & Masque Tradition* (Harvard University Press, 1968), p. 109；平川泰司『スペインサーとミルトン』1988年 あぼろん社 283頁；私市元宏『ミルトンの *Comus* 訳注』1980年 山口書店 180頁
 (11) David Masson, *The Life of John Milton* (1881；rpt. Peter Smith, 1965), I, 610, n. 2.
 (12) *Milton A Biography*, II, 1465.
 (13) John T. Shawcross, *Milton The Critical Heritage*, (Routledge & Kegan Paul, 1970), p. 119；ただし Thomas Hollis が 1761 年に編集した *The Life of John Milton* (1761；rpt. The Folcroft Press, 1969), p. 36 によれば "his *Comus* or mask presented at Ludlow castle," となっており mask と castle は小文字で始まっている；A. S. P. Woodhouse and Douglas Bush, *A Variorum Commentary on the Poems of John Milton* (Columbia University Press, 1972), II, pt. 3, 736.
 (14) *Milton A Biography*, II, 1273.
 (15) *Ibid.*, II, 789.
 (16) *Ibid.*, II, 791；*Milton's English Poetry*, pp. 71-2；*Milton Studies* III, p. 220, n. 1.
 (17) Cf. Wood = A symbol for the temptations of life in Dante, *Inferno* i 1-3 John Carey and Alastair Fowler eds., *The Poems of John Milton* (Longmans, 1968), p. 178 n；

In the midway of this our mortal life,
 I found me in a gloomy wood, astray
 Gone from the path direct : ……

Dante Alighieri, *The Divine Comedy*. Trans. Henry Francis Cary (Oxford University Press, 1910), p. 1 : 暗い森はブッシュもいのように「生とその危険についての伝統的な象徴」であります。松田実矩「『コウマス』におけるオウィディウスの要素・スペンサー的要素」39頁『ミルトン——詩と思想』所収1986年 山口書店

- (18) ……it [my advent'rous Song] pursues
Thing unattempted yet in Prose or Rhyme. (I. 15-6)
- (19) 平井正穂『ミルトン』昭和33年 研究社 76~77頁
正確には平井氏の引用は124行から127行までである。
- (20) ……this plant,……, was well known to herbalists as andros(h) aemon, so called because its juice is the color of man's blood. It belongs to the genus hypericum and is commonly called St. John's wort. Milton follows the herbalists in endowing it with magical properties. *Milton's English Poetry*, p. 78 : *OED* には1634年の *Comus* が初出例となっているが Edmund Spenser の *Astrophel* (1586年に書かれ1595年に出版)の1, 3にもこの語はでてくる。
- (21) 新井 明『ミルトンの世界』1980年 研究社 70頁
- (22) Northrop Frye, *Five Essays on Milton's Epics* (Routledge & Kegan Paul, 1966), p. 135.
- (23) A. S. P. Woodhouse, "Comus Once More," *The University of Toronto Quarterly*, 19 (1950), 222.
- (24) Don M. Wolfe, ed., *Complete Prose Works of John Milton* (Yale University Press, 1953), I, 893.
- (25) Hail wedded Love, mysterious Law, true source
of human offspring, sole propriety
In Paradise of all things common else. (IV. 750-52)
- (26) Don Cameron Allen, *The Harmonious Vision*, enl. ed. (The Johns Hopkins Press, 1970), p. 40.
- (27) 『スペンサーとミルトン』296頁
- (28) Samuel Johnson, *Lives of the English Poets*, vol. I : Milton (Kenkyusha, 1943), p. 55.
- (29) Ibid.
- (30) *Milton Studies* III, p. 201.
- (31) *The Harmonious Vision*, p. 39.
- (32) E. M. W. Tillyard, *Studies in Milton* (Chatto and Windus, 1964), p. 82.
- (33) Ernest Sirluck ed., *Complete Prose Works of John Milton* (Yale University Press, 1954), II, 527.